



## すごいあついからこそ いい土器ができた

「土器を焼くために、どんなかんじで焼くのか、どうやって焼くのか調べてみたいです。土器を焼きたいです。」これは、K君の振り返りです。畑や自然体験園などの土から粘土を取り出し、お皿や器、泥団子などを作ってきた子どもたちは、その作品を焼くために色々な準備をしていきました。



粘土の作品作り



焼き方を調べること



燃やす枝や薪集め



学級訪問に向けての準備



枝や薪をちょうどいい大きさにカット



マシュマロを焼いて燠火の熱を体感

2月中旬頃から野焼きの準備を進めてきた子どもたち。3月4日に野焼きの当日を迎えました。登校したチームから自分たちで採取した粘土で作った作品、薪や枝、うちわや軍手などの道具を運びました。運び終えたチームから着火剤となる藁や新聞紙や麻紐の上に枝や薪をのせて、準備万端。いよいよ着火となりました。「(火が)移ってる。移ってる」、「木に移ってないよ」、「今移ってる。木に移ってる」、「うちわ燃えないようにしないとね」、「あーあっち側(火が)ついてない」、「今ね、着火剤が頑張ってる」と子どもたちは、うちわで空気を送り、着火剤から枝へ、枝から薪へとより太いものへと火が燃え移るようにして、燠火を作りました。燠火ができたところで粘土の作品を焼いていきます。そこからおよそ3時間、火を絶やさぬようにとチームで協力していきました。



火が弱くなりそうなチームがあると、どこからともなくK君やT君が現れて、「ここに(薪を)置くといいよ」と火の位置や空気の出入り口を意識しながらベストポジションを教えていました。そして、「うおー」と力いっばいうちわであおぐと火が勢いよく燃えだしました。まるで火と対話している火付け職人のようでした。



「この前よりもめっちゃ熱い。何度くらいあるんだろう。」とY君は燠火よりも数段熱い火から感じる放射熱を感じていました。また、「陽炎がみえる」とR君の発見に、「夏の暑い日にみえるやつね」とWさんが応え、「影のところにも見えるよ」とH君がつけたし、「熱いんだろうね」というつぶやきもありました。子どもたちは火が作り出す熱さを、体や自然現象から実感していました。

火を絶やさぬようにと薪や枝をくべ続けていくと、当たり前ですが数が少なくなっていきます。残り時間と薪の数、燃え尽きる時間、火の強さ等を考慮して、入れる量の調節をしたり、薪や枝を調達して来たりしました。体だけでなく、頭もフル回転をして火を燃え続けさせていました。

3時間後、子どもたちが仲間と協力して燃え続けさせた火を弱めていきました。給食を食べている間に、だんだんと弱まっていきます。いよいよ粘土の作品を取り出します。「こんなにたくさん入れてわれちゃってないかな」と薪や枝の重みで割れていないか心配していたRさん。灰の中をトングを使って作品を探していきました。灰の中から作品を取り出す緊張の瞬間。割れていない様子を確認するとほっとした様子でした。



「黒くなってるどころあるけど、これって成功かな？」とH君はこれが焼き物となっているのか見た目では判断が付きませんでした。すると、友達がたたいて音を確認している様子が目に入ったようで、H君もやってみました。「先生も聞いてみて」と、作品をたたいた音を聞かせてくれました。カーンと高いかわいた音がしました。明らかに焼く前の音とは違います。また、T君は友達の作品も一緒に並べて、音を比べていました。同じ粘土を使ったはずなのに音が違います。まるで楽器のようです。その音を聞いて、音楽会で演奏した『アフリカン・シンフォニー』に通ずるものを感じました。音の違いに対して「厚さが違うんだよ」というY君。確かに薄い方がより高い音がしていました。

さらに、水を汲んでみて漏れないかどうかを調べていたT君。「全然しみてこない。ほら。」とその様子を見せてくれました。子どもたちは、色の違いや音の違い、水が浸み込むかどうかについて観察実験をすることで粘土から焼き物へと変化している様子を実感していました。

そして、取り出した作品をみてH君は「4年2組の伝統工芸はモックン(図工で作成したひみつのすみかの住人)と土器だ〜。」と達成感あふれる声で友達とお話していました。Rさんは「モックンはともかく、土器はいいかもね。」とツッコミをしていました。自分たちの手で粘土を取り、自分たちで作り、自分たちで焼いたからこそその言葉のように感じました。



今日、土器を焼いた時に火がすごくあつかったです。でもすごいあついからこそいい土器ができたと思います。最初は2つともいい土器になるかなって心配だったけど、2つともいい音もなったし、水もくめたからよかったです。不思議に思ったのは土器によって音がちがうことです。低い音もあれば高い音もあったからふしぎでした。うちわであおぐのも楽しかったし土器をはたいて音をならすのも楽しかったです。またやりたいです。(Y君)

子どもたちが3時間絶やすことなく燃え続けさせた火の熱があったからこそその土器の変化。この変化に出会えた野焼きができたのは、子どもたちがここまで仲間と協力して準備を積み重ねてきたからこそです。そして、保護者の皆様に道具の準備をしていただいたり、薪や藁を提供していただいたりと支えていただいたからこそ味わえたものです。

次の日に、野焼きの振り返りをしました。「きれいに焼けて嬉しかった。割れたら台無しになってしまうから。(T君)」や「火の強さとか気の重さで割れちゃうかと心配だった。(Aさん)」、「たくさんの土器を焼いたけど割れなくてよかった。(Mさん)」のように、割れずに焼くことができた喜びを感じていました。また、「(火を燃やした時に)熱いから火に怒られている感じがした。なんで木を入れるんだあって。(Mさん)」のように火の熱から感じたことや「Y君が『中をあおぐといいよ』って教えてくれたから、中をあおぐようにした。」、「それは、お父さんに教えてもらったんだけど、火元が中にあるって、あおぐと木に燃え移る。それで全体に熱が伝わっていく。(Y君)」と、勢いよく燃えさせるための工夫をしたことが続きました。一方で、N君の「水を入れたら下にしみってしまったからしみないようにしたい。」から、「漆をぬればいいんじゃない？」や「つるつるにしたいからコーティングするものをぬれば？」などより実用的でつるつるに仕上げることに目が向いていきました。そこで、松代焼きの湯飲みを紹介しました。実際に触ってみたY君は「お一つるつる。」と自分たちが焼いた土器との違いに驚いていました。「でも、松代焼には秘伝のものがあってできるのかな?(Aさん)」と職人さんの技が自分たちに本当にできるのかと心が動いているようでした。また、「そういえば、1年生の先生が土器が展示してあるところがあるって教えてくれたよ。」とMさんがみんなに伝えました。「実際に土器を見してみるのもいいかも。」という声もあがりました。



「絶対にわれなくて何百年も使える赤色の土器をつくりたい。(K君)」  
「わたしはろくろを体験してみたい。(Kさん)」  
「土器をつるつるにして使えるようにしたい。コツを知りたい。本物の土器を見たり知ったりしたい。水をいれてもしみないような実用できる土器を作りたい。(Rさん)」  
「①うるしをぬって焼き、つるつるした土器をつくってみたい②本物の土ぐうや土器をみたい。(Aさん)」

振り返りの中での友達の言葉から、これからの活動に向けて挑戦してみたいことがそれぞれ出てきました。今回の野焼きは、4年生での土ねんどの活動の節目であり、そして、次の活動につながるものになりました。